

「日米交流人形研究家の遠山博文さんが亡くなられた。連絡を受けたのは11月2日夕方。突然の訃報に言葉をなくした。つい2週間前、電話で普通に話したばかりだった。」

「先生、吉報ですよ。いつも心を痛めておられた、帰るふるさとのない答礼人形『ミス朝鮮』の落ち着き先が決まったそうです。米国のある大学が受け入れてくれるとのこと。東京浅草橋の人形店「吉徳」の青木勝さんが修復のため、抱っこして10月15日に帰国されました」と話すと、受話器の向こうからいつもの優しい声。「それは良かった、良かった、安心したよ」「修復が終わったら美人になった『ミス朝鮮』に合に行きましようね、きつとですよ」。

これが最後の会話となった。遠山さんとの出会いは1999年夏。長崎新聞の記者としてある取材に同行した帰り、「あなた『長崎瓊子』って知っていますか」と問われたことがきっかけで、幻のような史実があることを知り、興味を覚え取材を始めた。そして翌2000年夏、平和企画「海を越えた人形たち」戦争の世紀みつめて」の連載となった。取材を通して、日米人形交流の足跡を学ぶことで遠山さんとのつながりも深まった。

長崎親善人形の会(瓊子の会)

会長 山下 昭子

追悼 遠山博文さん

人形通じ国際親善に尽力



「青い目の人形 エレン・C」を抱く遠山博文さん
—米オハイオ州ウィルミントン大学平和資料館(2010年4月、山下昭子さん提供)

そして連載中の奇跡的な出来事として、73年もの間行方不明となっていた答礼人形「ミス長崎・長崎瓊子」がNY州ロチェスター市立科学博物館に保管されていることが判明し、「世紀の発見」と言われた。その後、県民の強い要望と募金によって2003年、「ミス長崎・長崎瓊子」里帰り展となって結実した。「ミス長崎里帰り展」が実現するまでの3年間、「里帰りの実行委員会」委員として活動。その間にはロチェスター市立科学博物館にも同行。同館との厳しい貸し出し交渉に英語力を発揮し、里帰り実現に尽力された。

当時、県立野母崎高校の英語教師だった遠山さんは、児童文学者で日米交流人形研究家の第一人者・故武田英子さん(東京)が、1981年に出版した「青い目をしたお人形は」(太平出版社)を読んだで感動。英語教材に取り上げたいと、武田さんに長崎を舞

その間にはロチェスター市立科学博物館にも同行。同館との厳しい貸し出し交渉に英語力を発揮し、里帰り実現に尽力された。

当時、県立野母崎高校の英語教師だった遠山さんは、児童文学者で日米交流人形研究家の第一人者・故武田英子さん(東京)が、1981年に出版した「青い目をしたお人形は」(太平出版社)を読んだで感動。英語教材に取り上げたいと、武田さんに長崎を舞

たにした原作を依頼した。執筆を引き受けた武田さんは取材で長崎を訪問した折、NBクラジオで「人形を探している」と呼びかけた。寄せられた情報をもとに訪ねた平戸市立平戸幼稚園で、2人は1927年に米国オハイオ州ウィルミントンから贈られ、戦禍を逃れて生き残った「青い目の人形 エレン・C」を確認した。1982年12月のことだった。遠山さんは県内初の方、里帰り展後の後継組織「長崎親善人形の会(瓊子の会)」会員としてカンボジア「タマコ・スクール」訪問プロジェクトにも積極的に参加。途上国の子どもたちにも変わらぬ愛情を注いだ。国際親善の意義を伝えようとする意志と情熱は人一倍強かった。

「瓊子の会活動も無事に10年を迎えることができました。残存する『青い目の人形』は反戦運動の証しだから、現存する人形にもっと注目し、人形を守った人たちの心を理解することが、今こそ大切だ」と強調されていたことを遺言として、平和・親善・交流の大切さをみんなで子どもたちに伝えていきます。見守っててください」

武田さんはこの事実を基に、「フィクションの物語『Little Mary』(山口書店)を書き下ろす。遠山さんは元東大講師らと協力して英訳、副読本として作成し同高校の英語学習教材として活用、海外にも発信して実践的な展開を行った。以来、教職の傍ら国内外の人形交流関係者と情報交換しながら調査、研究に情熱を傾けた。一方、里帰り展後の後継組織「長崎親善人形の会(瓊子の会)」会員としてカンボジア「タマコ・スクール」訪問プロジェクトにも積極的に参加。途上国の子どもたちにも変わらぬ愛情を注いだ。国際親善の意義を伝えようとする意志と情熱は人一倍強かった。

遠山博文さんは2日死去、72歳。